



▲ 旧広島陸軍被服支廠を視察

被爆建造物の保存など学ぶ

大熊未来塾が広島市を訪問

東日本大震災と原子力災害の伝承に取り組む一般社団法人大熊未来塾(木村紀夫代表理事)は、今後の震災遺構の保存や災害伝承の参考にするため、4月25日から27日に広島市を訪問し、2024年1月に国の重要文化財に指定された旧広島陸軍被服支廠などを視察しました。また26日には「被服支廠の保存と活用を考える」市民団体の会の代表で、被爆者の切明千枝子さんの証言を聞きました。

木村代表理事は「被服支廠などの被爆建造物を訪問し、多くの市民の努力によって保存に至った経緯を学ぶことができた」と

と成果を強調、「熊町小学校など中間貯蔵施設の中にある遺構の保存を考える上で参考にしたい」と語ります。また「80年前の原爆投下、その後の核の平和利用が、福島第一原子力発電所の事故につながっているのではないか」として、広島と福島の関係性に思いをはせます。



▲ 原爆ドーム前で切明千枝子さん(前列右から3人目)を囲む一行

相双地域支援サテライトの活動

地域復興支援



▲ 大槌町文化交流センターで開かれたパネル展



▲ 東京展では井上美和子さんの朗読劇「ぼんじもよ語り」を公演

3都県で避難者の歩み振り返るパネル展

原発事故の影響で県内外に移り住んだ避難者9人の歩みを振り返るパネル展「原発事故14年 福島『避難』のかたち」は3～5月、岩手県大槌町と東京・練馬、福島大学の3会場で開催されました。会期中は避難者による福島弁の朗読劇やトークイベントも行われ、訪れた人たちは原発事故を風化させまいと改めて胸に刻んでいました。

展示では強制避難者6人、自主避難者3人の事故前後の人生を写真と記事で紹介。避難先をついのすみかに決めた人や、古里との2地域生活を送る人などさまざまに生きる避難者が登場し、避難先の石川県で能登半島地震の被災者を支援する男性の活動も取り上げました。

アンケートでは「避難者の苦難と葛藤が感じられた」「避難者の過去と現在を知れる機会がもっと欲しい」などの声が寄せられました。相双地域支援サテライトではこれらの反響を受けて、今年7～9月、東日本大震災・原子力災害伝承館(双葉町)のほか、避難者の多い茨城県内で本展を巡回する予定です。

2025年度スタッフ紹介

～コミュニティ主体の復興に向けて取り組んでいます～



▲ 相双地域支援サテライトのスタッフら

相双地域支援サテライト長

藤室 玲治 特任准教授(復興創生担当)

金谷川キャンパス

〒960-1296
福島市金谷川1
福島大学地域未来デザインセンター
(保健体育棟1階)

前田 悠(川俣町・飯館村)
松原 久
(広域連携、大熊町・富岡町副担当)
北山 真理子(総務・経理)

富岡サテライト

〒979-1112
双葉郡富岡町
中央2丁目83
(とみおかワーキングベース2J)

佐藤 孝雄(田村市・葛尾村)
山田 美香(楢葉町・広野町)
加賀谷 環(大熊町・双葉町)
三枝 和代(富岡町・川内村)

浪江サテライト

〒979-1592
双葉郡浪江町大字
幾世橋字六反田7-2
(浪江町役場1階)

伊藤 航(浪江町・南相馬市)
山田 修司
(浪江町・南相馬市、双葉町副担当)

※各スタッフのかつこ内は担当自治体や任務

お知らせ 双葉町と茨城県でも「避難」のかたち展を開催します

相双地域支援サテライトは7～9月、好評を受けて「原発事故14年 福島『避難』のかたち」展を双葉町、茨城県つくば市と桜川市でも開催します。原発事故の影響で古里や慣れ親しんだ土地から離れざるを得なかった9人の暮らしと想いを、写真や記事を通して紹介します。入場無料。

- 東日本大震災・原子力災害伝承館1階(双葉郡双葉町大字中野字高田39)
2025年7月18日(金)～9月29日(月) 8/12、9/23を除く火曜日と9/24は休館
- つくば市役所1階(茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1)
2025年8月1日(金)～29日(金) 土日祝日は開庁
- 桜川市生涯学習センター さくらす(茨城県桜川市東桜川一丁目21番1号)
2025年8月30日(土)～9月30日(火) 9/15を除く月曜日と9/16は休館

相双の風 vol.42

2025年6月発行

発行／福島大学地域未来デザインセンター
相双地域支援サテライト

〒960-1296 福島市金谷川1

(金谷川キャンパス) TEL:024-504-2834
(富岡サテライト) TEL:0240-23-6675
(浪江サテライト) TEL:0240-23-5970
<https://satellite.net.fukushima-u.ac.jp/>



福島大学
地域未来
デザインセンター

相双地域支援
サテライト

相双の風

Vol.

42

2025年6月号

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS | トピックス

「遺骨探しは慰霊の場」

大熊町で続く汐風さん捜索 沖縄からも参加

延べ90人が参加した木村汐風さんの遺骨捜索活動

大熊町の帰還困難区域(中間貯蔵施設内)で5月2～5日、震災で犠牲になり、いまだに全身の8割ほどの遺骨が見つからない木村汐風(ゆうな)さん(当時小学1年生)の遺骨捜索活動が行われました。活動を呼びかけたのは、汐風さんの父親である木村紀夫さん(59)です。4日間で県内外から延べ90人が参加し、沖縄で戦没者の遺骨収集を続ける具志堅隆松さん(71)の姿もありました。

具志堅さんは2022年1月から捜索活動に加わっていて、最初の捜索で大腿骨を発見しましたが、今回はありませんでした。当初は「次の遺骨を早く見つけなければ」との焦りもあったそうですが、「今は遺骨捜索の活動そのものが災害伝承と慰霊につながると思うようになった」。また、沖縄や津波被災地で遺骨収集が終わらない段階で開発が進んできた状況を踏まえ、遺骨が眠る現場を残しながら捜索活動を続けることの意義を語っていました。



▲ 捜索活動に打ち込む具志堅隆松さん

終戦80年 原発被災地の戦跡を歩く 浜通り空襲と旧陸軍飛行場



原発事故で被災した福島県相双地域は、太平洋戦争終結間際の1945(昭和20)年8月、米英軍の激しい空襲にさらされ、多くの尊い人命が失われました。現在、東電福島第一原発が立地する大熊町や南相馬市に特攻隊員を養成したという旧日本軍の飛行場があり、標的にされたためです。80年前、一体この浜通りの地で何があったのでしょうか。富岡町や大熊町、川内村に今も残る戦争の痕跡をたどりました。

長崎に原爆が投下された8月9日と翌10日、東北地方の太平洋上で連合軍空母の艦隊から発進した艦載機の群れが、郡山市など県内各地の軍事施設や工場を次々と襲いました。相双地域では南相馬市原町区と大熊町夫沢地区にあった陸軍飛行場が狙われ、同市町のほか浪江町や双葉町、富岡町、川内村の市街地も機銃掃射や爆撃に見舞われました。

富岡町 | 機銃掃射が欄間貫く



▲ 大原本店旧店舗。機銃掃射の痕は2階部分に残る

◀ 機銃で撃ち抜かれた欄間の鳳凰の足

飛び込んだとたん、土蔵の前で爆弾がさく裂。すんでのところ命拾いしたそうです。爆風で土台ごとずれた土蔵は今もあり、爆撃でえぐられた穴の痕跡も残っています。

同店舗から東に約300メートル離れた傾斜地に防空壕の跡が二つ、ぽっかりと口を開けています。横幅1.5メートルほどの出入り口で、1個に10人以上が入れる広さ。震災後にこれらの前に立っていた家屋が解体され、人目に付くようになったといいます。町内にはこのほかに5個の防空壕跡が現存し、町教育委員会の三瓶秀文学芸員は「終戦80年にちなんだ課外学習で、大原本店と合わせて子どもたちを案内したい」と話します。

川内村 | 山里に落とされた焼夷弾



▲ 「爆心地」碑の前に立つ井出さん。実家は被害を免れた

阿武隈山地に抱かれた風光明媚な山里、川内村でも爆撃機が荒々しく牙をむきました。上川内地区を通る国道399号の脇に、空襲の被害を終戦の1年後に刻んだ「爆心地」碑が立っています。碑文や『川内村史』によると、8月10日午後、郡山市を爆撃した帰りらしい3機の艦載機が焼夷弾や機銃で集落を襲い、家屋22戸のうち18戸が全焼。東京から疎開中の男性ら3人が亡くなりました。碑文は、後に詩人草野心平を同村に招いた長福寺の矢内俊晃住職が筆を執り、「戦争八天災デワナイ、再び繰り返シテワナラナイ」(原文のまま)と記しています。

碑から約100メートル離れた国道沿いで旅館を営む井出茂さん(70)は「なぜこんな静かな村まで無差別攻撃されたのか。今、世界のあちこちで起きている戦争を、過去に経験した日本が止められないのはやるせないです」と唇をかみます。



▲ 富岡町の市街地でぽっかり口を開ける防空壕跡

大熊町夫沢地区 | 飛行場跡は戦後原発に

町々が空襲される原因となった大熊町夫沢地区の磐城飛行場の跡地では、1967(昭和42)年に福島第一原発が着工し71年に営業運転を開始しました。原発事故のため立ち入れなくなった敷地内に、かつて飛行場だったことを示す記念碑があります。「土地の来歴が分かる貴重な証拠。これは残さねばと思いました」と語るのは、同町の歴史に詳しい鎌田清衛さん(83)です。

鎌田さんは2016(平成28)年、東電職員に頼んで乾式拓本のような技法「フロッタージュ」で碑文を写し取ってもらいました。碑は横130センチ、縦90センチで1988(昭和63)年の建立。東電職員だった当時の志賀秀朗大熊町長や第一原発所長、元特攻隊員らが名を連ねています。

飛行場は碑文などによると、1940(昭和15)年、国の命令で農家11戸を立ち退かせた土地で着工し、請負業者のほか一般住民らが「半ば強制作業で」建設。2年後に「宇都宮飛行学校磐城分校」が発足し、45年2月からは特訓を受けた特攻隊の若者らが飛び立っていましたが、8月の空襲で壊滅しました。大熊町の市街地も同時に爆撃され、妊婦の胎内にいた赤ちゃんを含む少なくとも4人が犠牲になりました。

本土への空襲が激しさを増す中、旧制双葉中学や熊町国民学校の生徒・児童らが動員され、富岡町夜の森地区の桜並木周辺や同国民学校近くの松林に飛行場の練習機を隠したという証言があります。同地区に家が合った鎌田さんは幼い頃、母親に手を引かれ、「赤とんぼ」と呼ばれた複葉機のオレンジ色の機体を目にしたおぼろげな記憶があるそうです。



▲ 「磐城飛行場跡記念碑」のフロッタージュに目をやる鎌田さん

大熊町野上地区 | 旧製炭試験地の「捨石塚」

鎌田さんが、同飛行場と関連があるとみる史跡が西に約10キロ離れた大熊町野上字小塚の山中に残っています。戦時中の燃料ひっ迫を背景に国が統制物資だった木炭の増産を図ろうと、1940年に設立した研修施設「小塚製炭試験地」の跡地。町の許可を得て、祖父母が試験地で働いていた高橋清さん(64)の案内で帰還困難区域内の林道を分け入ると、高さ60センチほどの自然石に「捨石塚」と刻んだ碑が溪流の近くにひっそりとたたずんでいました。



▲ 捨石塚の脇に立つ高橋さん。昭和40年代まで試験地の倉庫などが残っていたという

これは試験地設立当時、管轄する富岡営林署長の石川蔵吉が製炭技術の向上のため、捨て石の精神で努力するとの決意を込めて建てたとされ、すぐそばには丸みを帯びた大小の石が幾つも積み上げられています。鎌田さんは、高橋さんの父で戦時中に試験地を遊び場にしていた六郎さん(故人)の証言から、飛行場の兵士たちが製炭研修に訪れていた可能性を指摘。「飛行場近くの海岸から波に磨かれた丸い石を拾ってきて積み、特攻で命を落とした仲間を悼んだのではないか」

高橋さんは「特攻隊員が炭焼きに来ていたとは考えられないが、暖房や炊事などに軽便な木炭は軍隊で重宝されただろう」。石川が離任した1943(昭和18)年から富岡営林署長を務めた製炭の権威岸本定吉さん(2003年死去)の著書などによると、神仏をあつく敬った石川は日々研修生に谷川で身を清めるよう言いつけ、そこで拾った石を捨石塚に供えさせました。戦況が悪化すると、陸海軍の小部隊が駐留するようになり、自隊で使うために製炭することもあったといいます。

捨石塚には川と海の石が交じっているように見え、さまざまな想像をかき立てます。

戦争と原発事故一。被災地に残る戦争の傷痕は80年の歳月を経て、いずれの時代も犠牲者は無辜(むこ)の民であることを、静かに語りかけているように見えます。



福島大学公式マスコットキャラクター めばえちゃん



▲ 記事に登場する戦跡など